

白衣散華

佐賀県伊万里市 久保田 昇

当時、昭和20年6月ビルマ（現ミャンマー）派遣軍の策集団は、強力な英印軍に包囲され、その指揮下にあった。私達小倉野戦重砲兵第5連隊第1大隊も、連日の雨の降り続く雨期のペゲー山系のジャングルの中を、一粒の米も無く、服は破れ、靴も無く、殆どが裸足で、泥濘の悪路に滑り、石や木の根に躓き、疲労困憊しながら、もう2ヶ月以上も転進が続いていた。

夕方宿営予定地に着けば、まず食料を探さなければならない。

幸いその日は集落近くに宿営することになり、夕暮れの集落をあちこち探し廻り、やっと畑の隅に積んである籾殻の下から籾を見付けることができた。早速飯盒一杯の籾をもらったが、籾では食えない。どうしようかと家を覗いたら、同行していた歩兵部隊の兵隊がすっかり暗くなった土間の隅で、仄暗い灯を前に手廻しの小さな引き臼で脱穀していた。

私もこれで脱穀しようと、声をかけたらもうしばらくで済むと言うので、飯盒の蓋に牛脂を入れ、服の破れを芯にして火を付け、すっかり暗くなった入口の柱に背を持たせて灯影に黒く動く歩兵の姿を見ながら、この転進（退却＝転進と言っていた）がいつ迄続くのか、この先どうなるのかなど考えていた。

やがて歩兵が済んで帰ったので、代ろうと籾の入った飯盒を左手に持ち、灯を付けた蓋を右手に掲げながら、暗い足元を用心して2、3歩進んだ時、踏み出した左足にグニヤとした柔い物を踏んだ。

アッ死体だ！！。直観すると同時にさっと足を引っ込めたため、どっと前に倒れた。

熱い、右手首にたぎった牛脂が掛った痛みと共に、鼻先にプンと油の匂がした。髪油だと思いい火をつけ直して見たら、軍服を着て、横に体を丸く折り曲げた女の死体で、私が倒れ込んだのはその頭の上で、髪油の匂は家でよく母が使っていた椿油と同じ様な匂だった。

ああこの人はあのペゲーのジャングルの中で私達が小休止していた時、「兵隊さーん、元気で行きましょう」と司令官と一緒に坂を下って行った従軍看護婦さんのうちの一人であろうと思った。

兵士でも苛酷なしかばねの道をここまで来て病気で息絶えたために遺棄されたのか、未だ生きていても歩行困難なために搬送も出来ず放置され、この土間で一人淋しく息を引き取ったのではないだろうか、まだ年若い看護婦さんであったろうに、もう誰一人訪れ弔うことも無いであろう異境の地で、最期を見取ってくれる人も無く、一人どれだけ嘆き悲しんで息絶えたであろうか。故郷には帰りを待っている親兄弟もいるだろうになどと次々と考えさせられて、戦争の冷酷無残さ、悲惨さと敗走の哀れさなど沁々と感じながら、死体の側でヒリヒリ痛む右手を我慢して脱穀を終えた。

手首の火傷は、薬一つ無く、雨に打たれ、汚れて化膿し、完治する迄に3ヶ月ぐらいかかり、

見まいとしても見える傷痕に、当時の事が重なる。

私は入隊前、仏が人と人とを結び付ける仏縁ということのある本で読んだ事があったが、誰一人看取る者も無く死んだであろうこの看護婦さんを哀み、仏が私に看取らせたのでは無いだろうか、これが仏縁と言うのかも知れないなどと思い、急いではいたが、そのままでは帰れない気がして、見知らぬ人であったが、どうぞ安らかに成仏をと拜んで帰った。

この日から10日ぐらい前だったろうか、山中で、雨が止み風が吹き落す雫に濡れ、石に腰を下し小休止をしている横を、雨外被を着て馬に乗った将校が10人ばかりの将兵を従えて下りて行った。

前屈みになり、真深に頭巾を被っていたのでその容貌は良く判らなかったが、誰かが策の軍司令官ではないだろうかと言っていた。とすれば往時は威風堂々であったろうけれど、巨木生い繁り、雨に濡れた山中を僅かばかりの部下に守られ、前屈みになり馬の背に揺られ、坂道を下りて行く姿は、一抹の寂漠さが感じられ、敗軍の将と言えなくも無かった。

と、パッと重たい雨を含んだ空気のはじけるような声が響き、一瞬ジャングルが明るくなったような気がした。

「兵隊さーん、元気で行きましょう」

突然この山中で女の勘高い声が響いた。見ると6、7人の従軍看護婦さん達であろう、軍服を着て、長い雨外被に包まれたような人達が続いて下りて行った。

中には疲労か病気か、重い足を引きずり遅れがちの人もいて、いつ迄もてるだろうかと何だか先が案じられ、哀れであった。

行軍は先行者が踏み固めた獣道のような細い山坂の一木道で、石や木の根につまづき、降り止まぬ雨の悪路に滑べり転び、病弱者は次第に遅れ、遂には道端にうずくまり死んで行くであろう将兵や、既に息絶えた者が日一日と増えていった。

もう既に息絶えた者や、寝てうづくまって助けて下さい、お米を下さいと手を差し出し、また手を合わせて哀願する人や、もう手を上げる力も、蠅さえ追う気力もなく、じっと見つめている人の、その空ろな瞳には何が映っているのだろうか、私自身食える物は何一つ持っていない。愚図愚図していると手が伸びて来て足を引っ張られそうな気がした。

その中から

「兵隊さーん、助けて下さーい」

可細い透き通る女の声が肺腑に突き刺るように響いて来た。

私はもう見て所在を確認することもできなかった。ああ、またもあの時の看護婦さんがと耳を塞ぎたい気持ちで逃げるように通り過ぎた。

戦後、看護婦さんも兵隊と同様その消息が掴めず、生死不明のまま、戦病死の三文字で片付けられたであろうが、その三文字の裏に秘められた悲しみを誰が読み取ることができるだろうか。

戦後抑留されマンダレーにいた時、英軍病院へ使役に行った者から、病院に日本人看護婦が

3名いて、待遇は英軍将校並だと言っていたが、あの時の看護婦さんで助かったのはその3名だったのかも知れないと思った。

私は復員後、中隊全戦没者の命日は判らないので、私が山から出て終戦を確認した8月30日を全戦没者の命日として、また誰か判らないけどあの看護婦さんも併せて正信偈を唱え、冥福を祈り、今日まで続けている。

昭和55年と60年の2回、機会があつてミャンマーに戦没者迎拝慰霊団として行くことができて、戦時中私達の陣地として一番印象の深いポパ山で、戦没者の慰霊をすることができたが、その時、偶然にも同行者に戦時中やはり従軍看護婦として、ミャンマーのメイミョウにいたと言う人がいて、この看護婦さんの話をしたら、策集団にいたのは和歌山班の従軍看護婦ではないだろうかと教えてくれたが、尋ねる術も無くもう50年にもなってしまった。